

中辺分別論(障品)の和訳並びに研究(1)

舟橋尚哉

はじめに

訳を試みようと思う。

* * *

私は今春、「中辺分別論の諸問題——相品・障品・眞実品を中心として——」(大谷学報、第五十二巻第四号)という小論文を発表したが、障品 (avarana-pariccheda) については十分論することができなかったので、ここに試訳とともに、障品についての若干の研究を載せて識者のご批判、ご鞭撻をお願いしたいと思う。

中辺分別論の第一章相品、第三章眞実品については、大乘佛典(世界の名著²、中央公論社、昭和42年刊)に長尾博士の現代的な訳が載っているが、その他の章は、山口益博士の「中辺分別論積疏」(安慧釈)に部分的な訳が見られるだけである。いま私は、山口博士の安慧釈の訳を参考にしながら、中辺分別論第二章障品の世親釈の和

一、和訳文は Nagao 本 (Madhyāntavibhāga-bhāṣya, Tokyo 1964) を底本とした。

一、本文の上欄に底本の頁数を附し、下欄に Tatia 本 (Dr. Natthmal Tatia, Prof. Anantatal Thakur: Madhyāntavibhāga-bhāṣya, Patna 1967) の頁数を附した。

一、チベット訳(北京版)の頁数を本文中の右肩に示した。

一、本文中の「」の中は、文意を明確にするために訳者が補ったものである。

一、本文中の(一)(二)は訳者が便宜上つけたものである。

* * *

第二章 障 品

1、遍等の五障

障^{7b} (avarana) に関して「論主は」語った。

「遍満⁽¹⁾と一分と増盛と平等と取捨とは、二〔種姓〕

の障であると説かれたり」(第一偈 a b c)

その中、(一)遍満 (vyāpīṇ) とは菩薩の種姓の人々の、煩惱と所知との障にして、遍〔障〕なる故に。(二)一分とは声聞等の種姓の人々の煩惱障である。(三)増盛とは彼等同じ〔声聞等と諸菩薩〕の貪行者等の〔障〕である。(四)平等とは等分行者の〔障〕である。(五)生死の取捨の障とは、菩薩の種姓の人々の無住処涅槃に対する障である故に。以上、かくの如きが所応に随って両者〔二種姓〕の人々の障であると説かれたのである。すなわち、菩薩の種姓の人々の〔障〕と、声聞等の種姓の人々との〔障〕である。

「煩惱の相は九種である」(第一偈 d)

「諸結は障である」(第二偈 a)

九結は煩惱障である。これら〔九結〕は何にとつての障であるか。

「〔初の二は〕厭離と捨にとつての〔障〕であり、〔所余は〕真実を見ることにとつての〔障〕である」

(第二偈 b c)

(一)愛結は厭離にとつての障である。(二)恚結は捨にとつての〔障〕である。なぜなら、彼〔恚結〕によりて、違逆せる恚の対象物(依止)に対してさえも、平静を保つ(捨する)ことはできないからである。所余は真実を見ることにとつての障である。どうしてかといえ、それらは次第の如くであるからである。

「身見と、その依止との〔遍知における障〕である」(第二偈 d)

「滅と道と〔三〕宝とにおける、利養と恭敬における、遠離⁽⁹⁾(儉約)の遍知^{8a}における」(第三偈 a b c)

諸結は障である。〔前出第二偈 a〕(三)実に慢結は有身見を遍知するにおける障である。現觀の時に於いて、有間にも無間にも我慢が現起する力によって、それ〔身見〕が断ぜられない故に。(四)無明結は有身見の依止を遍知する

また〔頌に曰く〕

2、加行に対する九つの結(煩惱)の障

における「障」である。それ「無明結」によって、諸取蘊

を遍知せざるが故に。(五)見結は滅諦を遍知するにおける

「障」である。有身と辺執との二つの見によって、それ

「滅諦」を怖畏するが故に。邪見によって「滅を」謗る¹²

が故に。(六)取結は道諦の遍知における「障」である。別

様に「本来あるべき相とは異なつて」、最勝なる淨である

と取るが故に。(七)疑結は三宝を遍知するにおける「障」

である。それ「三宝」の功德を信受しない故に。(八)嫉結

は利養と恭敬を遍知するにおける「障」である。その

過失を見ない故に。(九)慳結は遠離(儉約)の遍知にお

ける「障」である。資生の具に貪著するが故に。

3、菩薩の障

a、善等の十に対する障

「善等に対する十種の別の「障」あり」(第三偈d)

また別の障は、善等の十種において知らるべきである。

この障とは何か。また善等とは何か。

「無加行と、非処に不如理に行ぜられたと、〔善〕

不生と、正思惟しないことと、資糧の未円満と」

(第四偈)

「種姓と善友とを具せざると、心の疲厭と、正行を

欠くことと、悪人と極悪人と共住すると」

(第五偈)

「顛倒の」^{8b} 鈍重と、三「障」により残余せるもの

と、般若の未成熟性と、本性としての鈍重と、懈怠

と放逸性と」(第六偈)

「有と資財とに執著すると、下劣なる心と、〔人を〕¹³

信じないと、無勝解と、言の如く「義を」思量する

と」(第七偈)

「正法を恭敬しないと、名利(財利)を重んずると、

同様に憐みの心がないと、聞の欠乏と、〔聞の〕少

ないこと(少聞)と、三昧に修治しないこと」

(第八偈)

これが障である。善等とは何か。

「善と菩提と摂受と有慧と無乱と無障と、廻向と不

怖と不慳と自在とが善等である」(第九偈)

これら善等の中で、いづれの上に、幾種の障が知らる

べきか、と。

「論主は」語った。

「実にこれら〔善等〕には、各々三つずつの障が〔あ

ると〕知らるべきである」(第十偈a—b)

善には三障があり、(1)無加行と、(2)非処加行と、(3)不

如理加行とである。菩提には三「障」があり、(1)善(法)を生ぜしめないと、(2)正思惟しないことと、(3)資糧の未円満とである。摂受は発菩提心である。それには三「障」

があり、(1)種姓を具せざると、(2)善友を具せざると、(3)疲労困ぱいの心とである。有慧とは菩薩性である。彼

「菩薩」の慧における三障とは、(1)正行を欠いていると、

(2)悪人と共住すると、(3)極悪人と共住するとである。そ

の中、悪人とは愚癡の人であり、極悪人とは加害者である。無乱には三「障」があり、(1)顛倒の鈍重と、(2)煩惱

等の三障の中の、いずれか一つ残余せるものと、(3)解脱^{9a}を成熟せしめる未成熟性である。障の断滅は無障である。

それ「無障」には三「障」があり、(1)俱生の鈍重と、(2)

懈怠と、(3)放逸とである。廻向には三「障」があり、そ

れらによって「人は」他処に心向けしめられる。無上

^{p31}正等覺に「廻向するに」非ず。(1)有に貪著すると、(2)資

財に貪著すると、(3)下劣なる心とである。不怖の三「障」

とは、(1)人を尊重しないと、(2)法を信解しないと、(3)言

の如く義を思量するとである。不慳の三「障」とは、(1)

正法を恭敬しないと、(2)利養と恭敬と供養とに対して尊

重することと、(3)諸衆生に対して慈悲心なきとである。

自在の三「障」とは、それによって「人は」自在を得な

い。すなわち、(1)法の欠乏を起すであろうような業を生ぜしめるによつての聞の欠乏と、(2)少聞と、(3)三昧の不修習とである。

註

(1) 遍障(具分障)、(二)一分障、(三)増盛障、(四)平等障、(五)

取捨障の五障については、以前、論じたことがある。拙稿

「中辺分別論の諸問題——相品・障品・真実品を中心とし

て——」(大谷学報第五十二巻第四号)参照。

(2) Nagao 本 (p. 28. 16) Pandeya 本 (p. 51. 16) Tib. (de la) 共に tatra とあるが Tatia 本 (p. 11. 16) のみ tad とになっているが、tatra とすると思ふ。

(3) Nagao 本では kani sakalyāt (p. 28. 16) とあるが、kani

is dubious (疑わしい) と脚註にあるが、Tatia 本 (p. 11

16) Pandeya 本 (p. 51. 16) では初めから kani はなく、

Tib. では avatara を補った。

(4) Tib. 北京版 (123—2—e) デルゲ版、および Bhag

na となっているが、Bhag pa の誤まりと思われる。

(5) 山口博士「中辺分別論釈疏」(p. 104. 12) によつて補った。

(6) Nagao 本では kasyātasyāvaranāṃ (p. 28. 16) となっているが、Tatia 本も Pandeya 本も、kas-

yaityāvaranāṃ (Tatia 本 p. 11. 16. Pandeya 本 p. 53. 127) と理解しているのに従った。

(7) Nagao 本では pratigha-vastu upakṣitum (p. 29. 11) となつていて、長尾博士はこの saṃdhi が正確でなかつた

を脚注1に注意しておられるが、Tatia 本では *pratiṅga-vastupekṣitūn* (p. 11. l 20) と Compound になっている。

なお、このところはチヘット訳に従って上掲の如く訳しておいたが、文法的には *pratikṣām* と *vastu* とは同じ中性、単数の業格である。

- (9) 玄奘訳によって「遠離」と訳したが、Sk. *samleka* であり、山口博士は「儉約」と訳しておられる。(釈疏一一三頁参照)

なお、これについて、拙稿「中辺分別論の諸問題——相品・障品・真実品を中心として——」(大谷学報第五十二卷第四号所収) 五七頁参照。

- (10) 「有間ニモ無間ニモ」というのは玄奘訳であるが、真諦訳は「有異品ト無異品ト」と訳している。(山口博士「中辺分別論釈疏」一一六頁註(1)参照)

- (11) 有身「見」と辺執「見」はいうまでもなく、五見(有身見、辺執見、邪見、見取見、戒禁取見)の一つである。

- (12) 邪見も五見の一つである。

- (13) 取結 (*parmarśa-saṁyojana*) は五見の中の見取見 (*diṣṭi-parmarśa*) と戒禁取見 (*śīla-vrata-parmarśa*) に相当するものと思われる。

- (14) Sk. *anyathā* の訳である。山口博士は還元梵語 *anyen-ākareṇa* (山口本 p. 73. l 13) として、「余他の行相によって浄を取るが故に」(中辺分別論釈疏一一二頁)と訳しておられるが、「別様に」とは「本来あるべき相とは異なっ」の意であると思う。玄奘訳には「取余法為浄」

とあり、「浄」とのみあるが、Sk. *agra-suddhi* は「最勝なる浄」の意であると思う。

- (15) 煩惱障、業障、異熟障の三障のことである。

* * *

「研究」

一

(1) 遍等の五障とは、(一)遍障(具分障)、(二)一分障、(三)増盛障、(四)平等障、(五)取捨障の五障のことであって、これらはいずれも二種姓(菩薩と声聞等)の障である煩惱障と所知障に関連して説かれている。初めに(一)遍障とは菩薩の種姓の人々の煩惱障と所知障であって、「遍滿(遍滿)とは遍[障]なる故に(*sakalyat*)」とあり、菩薩にとっては煩惱障と所知障との一切の障が障となるのである。(二)一分障とは声聞等の種姓の人々の煩惱障である。真諦訳には「一方障」となっているように、「一方」すなわち「煩惱障」のみを指すものである。菩薩は煩惱障と所知障とを断ずるが、声聞等は煩惱障のみを断ずるものにして、所知障を断じようとはしない。なぜなら彼等(声聞等)にも所知障(不染汚無知)はあるが、それが

障とならない。すなわち、所知障が、障として自覚されないからである。だから安慧釈には「而も彼〔無知〕は彼等〔二乗〕の障にあらず。彼〔無知〕有りながら〔彼等は〕声聞と独覺との菩提を得るが故なり」と説かれている。(三)増盛障とは「彼等〔声聞等と諸菩薩〕の貪行者等の〔障〕である」とあるように貪行等、すなわち貪行、瞋行、癡行等を行ずる者の障である。増盛 (udhikta) に相当する語が北京版、デルゲ版ともに lhag ma (残余) となっているが、これはすでに論じたように lhag pa (増上、増盛) の誤まりであろう。(四)平等障とは等分行者の障であって、等分行は貪行、瞋行、癡行等や、薄塵行とともに用いられるが、これらに關してはすでに考察したので、ここでは省略する。(五)取捨障とは生死を取捨する障であり、安慧釈には「菩薩は慈悲によりて生死を取り、また智慧によりて生死の過失も実の如く見て捨す」と説かれ、またこの障は「菩薩種姓の無住処涅槃における障なる故に」と説かれている。

これら五障は、いずれも菩薩種姓と声聞種姓の二種姓の人々の障であり、したがって煩惱障、所知障に關連して説かれている。ここで注意すべきは、所知障の説明として安慧釈には、

「五明処に勤行せずしては、聖上者すら一切智性たらず云々」⁽⁶⁾

と説かれていることである。五明処とは大乘莊嚴經論卷十八に、

「その中、法 (dharma) を知るとは五明処を知ることである。すなわち内明、因明、声明、医明、巧明なり」⁽⁸⁾

(二十五偈註、Sk. p. 136)

と説かれているように、内明等の五明であるが、これらは大乘菩薩の知るべき法、修すべきものであり、ここにも「五明処に勤行せずしては」と説かれている。そしてそれに対する障が所知障に他ならない。従来、所知障の内容が「不染汚無知」とか、「習氣」とかいわれるのみで、あまり明確でなかったが、この中辺分別論や大乘莊嚴經論の註釈などによって、所知障の内容がより一層明らかになってきたように思う。

二

次に「加行に対する九結の障」では、九結、すなわち九つの煩惱が説かれている。「九結は煩惱障である。これら〔九結〕は何にとつての障であるか。云々」(本文五八頁参照) といって、九結が説かれるが、和訳の註(7)

で注意した如く、「これらは何にとつての障であるか」のサンスクリットは Nagao 本では *kasyāitsyāvarāṇam* (p. 28. 216) となつてゐる。長尾博士は Ms. には *ka-sautāsyāvarāṇam* (or *kasyāita-*) とあることを注意しておられるが、Tatia 本 (p. 11. 116) は Pandeya 本 (p. 53. 1 27) は *kasyaitānyāvarāṇam* となつてゐる。従つて *kasya-etasya* ではなく、*kasya-etāny* と読む方が理解しやすい。Tib. de dag gan la もそれを示唆しているものと思われる。

さて九結については、大毘婆沙論卷五十にも説かれているように、「愛結、悲結、慢結、無明結、見結、取結、疑結、嫉結、慳結」(大正二七、二五八上)のことである。その中、「愛結と悲結とは厭離と捨にとつての障である」といわれ、(一)愛結は厭離にとつての障であると語られているが、大毘婆沙論には、

「云何んが愛結なりや。謂く三界の貪なり」(大正二七、二五八上)

と説かれている。(二)悲結は捨にとつての障であり、「違逆せる悲の対象物(依止)に対してさえも、平静を保つ(捨する)ことはできないから」、悲結は捨にとつての障であるといわれる。大毘婆沙論には、悲結について

「有情を損害せんと欲するなり」(大正二七、二五八中)と説かれている。慢結より慳結に至るまでの余の七結は眞実を見ることにとつての障であるといわれている。その中、(三)慢結は有身見を遍知するにおける障であり、(四)無明結は有身見の依止 (*vastu*) を遍知するにおける障である。(五)見結は有身と辺執との二見によつて滅諦を怖畏する故に。邪見によつて「滅を」誹謗する故に」といわれているが、大毘婆沙論でも

「云何が見結なりや。謂く三見なり。即ち有身見、辺執見、邪見を総じて見結と名く」(大正二七、二五八中)と説かれている。(六)取結は道諦の遍知における障であるといわれ、「その中、取結は見取と戒禁取となり」といわれているが、大毘婆沙論でも、

「云何が取結なりや。謂く、二取なり。即ち、見取と戒禁取とを総じて取結と名く」(大正二七、二五八中)

と説かれている。これら見結と取結とについて語られている「有身見、辺執見、邪見、見取見、戒禁取見」は、いうまでもなくいわゆる五見である。(七)疑結は三宝を遍知するにおける障であり、(八)嫉結は利養と恭敬とを遍知するにおける障であり、(九)慳結は遠離(儉約)を遍知するにおける障である。大毘婆沙論には、

「疑結は諦においての猶予」(大正二五八下)

「嫉結は心の妬忌」(大正二五八下)

「慳結は心の悋護」(大正二五八下)

であると説かれている。このように九結は阿毘達磨の教義を中辺分別論の中に、巧みに取り入れたものであることが知られる。

三

以上が菩薩と声聞等に共通の障であるが、安慧釈には、「如上」の「障」のみ障なるか。「曰く」如上の「障」は尚菩薩と声聞等に共なり。然るに諸菩薩について云々」

といって、善等の十に対する障、すなわち菩薩障が説かれている。善等の十とは、

「善と菩提と摂受と有慧と無乱と無障と、廻向と不怖と不慳と自在とが善等である」(第九偈)

と説かれているように、「善、菩提、摂受云々」の十である。そして「これら「善等」には、各々三つずつの障が知らるべきである」(第十偈 a—b) といわれ、例えば (一) 善には (1) 無加行、(2) 非処加行、(3) 不如理加行、(二) 菩提には (1) 善「法」を生ぜしめない、(2) 正思惟しないこと、

(3) 資糧の未円満などが障として説かれている。(三) 摂受は発菩提心であり、それには三障があつて、(1) 種姓を具せざる、(2) 善友を具せざる、(3) 疲労困ぱいの心であるといわれる。発菩提心のサンスクリットは *bodhi-citta-ut-pāda* であり、直訳すれば「菩提心を起さしめる」となるかと思う。また善友のサンスクリットは偈文では *mītra* とあるのみであるが、世親註では *kalyāṇa-mitra* となっている。(四) 有慧とは菩薩性であり、その慧にも三障があり、(1) 正行を欠いている、(2) 悪人と共住する、(3) 極悪人との共住であるといわれる。「悪人」のサンスクリットは *kuṣṭhāna* であり、玄奘は「鄙者」と訳している。愚癡の人 (*mūḍha-jāna*) のことである。「極悪人」のサンスクリットは *duṣṭa-jāna* であり、これも「悪人」であるが、*duṣṭa-jāna* は *pratīkṣita* (加害者) であるところなので、いまは訳語を変えて「極悪人」とした。

次に (五) 無乱に三障があり、(1) 顛倒の鈍重、(2) 煩惱等の三障の中のいずれか一つ残余せるもの、(3) 解脱を成就せしめる慧の未成熟性であるといわれる。ここで煩惱等 (*klesha*) とは、いうまでもなく煩惱、業、異熟の三障のことである。「解脱を成熟せしめる慧の未成熟性」のサンスクリットは *vimukti-paripācīnyāḥ prajñāya ap-*

aripakvata⁷とある。paripaccināḥ は pari-V^{pac} の caus. paripācaya + in その女性形 paripācini の Sg. G. と理解し、このように訳した。勿論 prajñāya は prajña の f. Sg. G. prajñāḥ の意である。(六)無障の三障とは、(1)俱生の鈍重、(2)懈怠、(3)放逸であり、(七)廻向の障とは「心を他処に向けしめる (parināmayati)。無上正等覺〔に廻向する〕に非ず」と説かれる。Nagao 本には parināmayati とあり、註(四)に Ms. には parināmayati とあったとあるが、Tatia 本は Ms. の ~~parināmayati~~ parināmayati としている。

しかし Pandeya 本では parināmayati としている。Monier-Williams にも caus. parināmayati とあるから、Nagao 本の訂正は正しいと思われる。anuttarasyaṃ も uttara, antara, apara などとは tad の変化をするから(荻原文法一一三条)、f. Sg. I. は anuttarasyaṃ⁷とよく。この廻向の三障とは、(1)有に貪著す、(2)資財に貪著す、(3)下劣なる心であり、(八)不怖の三障とは、(1)人を尊敬しない、(2)法を信解しない、(3)言の如く義を思量するであり、安慧釈には「不生不滅、本来寂靜等の義を声(言)の如くにのみ了解して、深密の義の眞実を悟了せず云々」といって、言の如く義を思量するのではなくて、大乘佛教で

はその説かんとする内面の密意趣が重要なのである。(九)不慳にも三障があり、(1)正法を恭敬しないことと、(2)利養と恭敬と供養に対して尊重することと、(3)諸衆生に対して慈悲心なきとである。ここで「利養と恭敬」(lābha-saṅkāra) とあるが、先の九結を説くところでも説かれている使ひ方である。(障品第三偈 a—b 参照)但し、障品第三偈では、Sk. lābha-saṅkāra であり玄奘訳真諦訳ともに「利養と恭敬等」とあるだけであるが、いまここでは、Sk. lābha-saṅkāra-pūja に対して、玄奘訳は「名譽と利養と恭敬」とし、真諦訳は「利養と恭敬」とあるが、一般的には「利養と恭敬と供養」と訳す方がよいと思う。最後の(十)自在の三障とは、(1)聞の欠乏と、(2)少聞と、(3)三昧の不修習とである。その中、(1)聞の欠乏 śruta-ryāsaṇa とは、法の欠乏を起すであろうような業を生ぜしめるによつての聞の欠乏といわれる。この聞の欠乏は、玄奘訳には「置聞」とあり、真諦訳には「聞災」「無聞」とある。

註

- (1) 遍等の五障については、拙稿「中辺分別論の諸問題——相品・障品・眞実品を中心として——」(大谷学報第五十卷第四号)五六頁参照
- (2) 山口博士「中辺分別論釈疏」一〇二頁—一〇三頁参照

- (3) 拙稿「中辺分別論の諸問題——相品・障品・真実品を中心として——」五六頁参照
- (4) 同書五六頁——五七頁参照
- (5) 山口博士「中辺分別論釈疏」一〇四頁参照
- (6) 同書一〇三頁参照
- (7) 拙稿「煩惱障所知障と人法二無我」（佛教学セミナー第一号）五七頁参照
- (8) *Tatra śāstrajñatāyāḥ pañca vidyāsthanāni vastu | adhyātmaśāstrāḥ hetuśāstrāḥ śābdavidyā ciktisāvidyā*

- śūpakarmasthānavidyā ca* | (Lévi p. 136, l. 21)
- (9) 山口博士「中辺分別論釈疏」一二二頁参照
- (10) 九結については俱舍論卷二十一（大正二九・一〇八下）にも見られる。
- (11) 山口博士「中辺分別論釈疏」一一八頁参照
- (12) 山口博士「中辺分別論釈疏」一二五頁参照
- (13) 真諦訳の偈文には「聞災」とあり、本文中には「無聞」とある。

(未完)